

病虫害発生予報 第5号(8月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量	
水稲	いもち病	並	カンキツ	ミナキイロアサミウム	並	
	紋枯病	並		ミカンキイロアサミウム	やや少	
	白葉枯病	並		ハスモンヨトウ	やや多	
	縞葉枯病	やや多		シロイチモジヨトウ	並	
	ニカメイガ	並		カキ	黒点病	並
	ヒメトビウンカ	やや多			かいよう病	並
	ツマグロヨコバイ	やや多			ミカンハダニ	やや少
	セジロウンカ	~やや少			ヤノカイガラムシ	並
	トビイロウンカ	多			チャノキイロアサミウム	並
	イチモンジセセリ	やや多			ゴマダラカミキリ	並
コブノメイガ	並	果樹全般	炭そ病	並		
斑点米カメムシ類	並		うどんこ病	並		
野菜	疫病		並	円星落葉病	並	
	モザイク病		並	角斑落葉病	並	
	アブラムシ類	並	フシコナカイガラムシ	並		
	ハダニ類	やや多				

気象予報

1 か月予報 (予報期間 7月24日～8月23日 大阪管区气象台)

< 特に注意を要する事項 >

期間の前半は気温が高く、かなり高くなる日もある見込みです。

< 予想される向こう1か月の天候 >

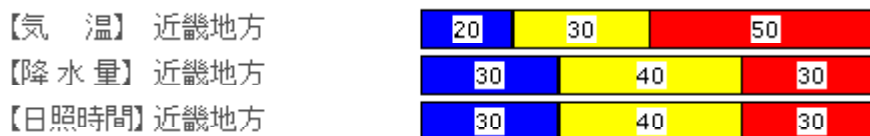
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の気温は高い確率50%です。

週別の気温は、1週目が平年並または高い確率ともに40%、2週目が高い確率50%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

		月平均気温 (平年値) (°C)	月降水量 (平年値) (mm)
8 月	和歌山	27.8	和歌山 97
	潮 岬	26.5	潮 岬 240

I. 水 稲

1. いもち病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の紀南地域の早期水稲では、葉いもちの発病株率は7.2%（平年12.4%）と平年並であった。
- ② 7月中旬の紀北・紀中地域の普通期水稲では、葉いもちの発病株率は4.8%（平年5.2%）と平年並であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 穂ばらみ期防除を重点とし、葉いもちの多発ほ場では穂ぞろい期の追加防除を行う。
- ② 常発地では次年度から罹病性品種の作付を避ける。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の紀南地域の早期水稲では、紋枯病の発病株率は0%（平年4.0%）と平年に比べやや少なかった。
- ② 7月中旬の紀北・紀中地域の普通期水稲では、紋枯病の発病株率は0%（平年0.8%）と平年並であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂期に発病株率5%以上のほ場では、穂ばらみ期に薬剤散布を行う。
- ② 出穂後も上位葉への進展がみられる場合には追加散布を行う。

3. 白葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の調査では発生が認められなかった（平年発病株率0%）。
- ② 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 低湿地の冠水しやすいほ場は発生に注意し、発病を認めたら早期に防除する。

4. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の縞葉枯病の発病株率は、紀南地域の早期水稲で0%（平年0.03%）、紀北・紀中地域の普通期水稲で0%（平年0.03%）と、共に平年並であった。
- ② ヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市で15.3%（前年17.7%）、かつらぎ町で19.1%（前年11.3%）であった。地域の保毒虫率が10%を越えると発病株が多くなるとされている。
- ③ 前年の本田における25株あたりイネ縞葉枯病発病株数は、7月の紀南地域で0.3株（平年0.0株）、8月の紀北・紀中地域で0.5株（平年0.0株）と平年に比べやや多かった。
- ④ ヒメトビウンカの8月の発生量はやや多いと予想される。

5. ニカメイガ 第2世代(紀北・紀中地域)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり被害茎数は、紀北地域0(平成0.0)、紀中地域0(平成0.0)であった。
- ② 4月から7月4半旬まで、フェロモントラップ(紀の川市)では誘殺されていない(平成0.5頭)。
- ③ 近年、発生が極めて少ない。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第1世代幼虫による心枯茎を認めたほ場では、第1世代成虫の予想発蛾最盛期(平成8月3半旬頃)から1週間までの間に防除を行う。

6. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域は15.5頭(平成5.4頭)、紀北・紀中地域は15.6頭(平成9.1頭)と平年に比べやや多かった。
- ② 予察灯による7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市9頭(平成10.6頭)、上富田町0頭(平成1.0頭)、那智勝浦町3頭(平成1.1頭)である。

7. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 紀北・紀中地域：やや少 紀南地域：やや多

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域は32.7頭(平成6.2頭)と平年に比べやや多かった。一方、紀北・紀中地域は0.2頭(平成8.7頭)とやや少なかった。
- ② 予察灯による7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市0頭(平成4.6頭)、上富田町1頭(平成4.4頭)、那智勝浦町369頭(平成50.6頭)である。

8. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域225頭(平成52.0頭)、紀北・紀中地域184頭(平成97.5頭)と平年に比べ多かった。
- ② 予察灯による6月から7月4半旬までの誘殺数は、紀の川市651頭(平成223頭)、上富田町644頭(平成356頭)、那智勝浦町543頭(平成333頭)と平年に比べ多い。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 平成22年度発生予察注意報第3号を参照する。

9. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 7月中旬の25株あたり発生密度は、紀南地域0.5頭(平成0.2頭)、紀北・紀中地域1.3頭(平成0.4頭)であった。
- ② 予察灯による6月から7月4半旬までの誘殺数は、紀の川市2頭(平成1.4頭)、上富田町3頭(平成0.6頭)、那智勝浦町4頭(平成1.6頭)である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月中旬の発生に注意し、株あたり成幼虫4～5頭の発生を認めた場合は薬剤散布を行う。

10. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 7月中旬の25株あたりツトム数は、紀南地域0.3(平成0.1)、紀北・紀中地域0(平成0.1)と平成並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 8月上旬の発生に注意し、若齢期の防除に重点を置く。

11. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 7月中旬の25株あたり上位2葉の被害は、紀南地域は51.3葉(平成4.1葉)と平成に比べ多かった。

② 7月中旬の25株あたり上位2葉の被害は、紀北・紀中地域は3.3葉(平成2.2葉)と平成と比べてやや多い程度であるが、被害葉が目立つ場合は散見された。

③ 紀の川市の予察灯で、6月20日に飛来を認めた。この頃から断続的に、成虫が水田に飛来したと思われる。

④ 蛍光灯誘殺箱(紀の川市)による6月から7月4半旬までの誘殺数は、12頭(平成4.2頭)と平成に比べ多い。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 飛来時期から、第1世代の発蛾最盛期は7月5～6半旬頃と推定される。

② 防除適期は、粒剤の場合は第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤(乳剤、水溶剤、フロアブル等)の場合は第2世代幼虫発生時期(第1世代の発蛾最盛期の7日後)である。

③ 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位2葉の被害葉率が40%になると10%程度減収する。それ以降の被害は被害葉率80%以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、紀南地域の早期水稻では防除の必要性は低い。

④ 平成22年度病害虫防除技術情報第1号を参照する。

12. 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市79頭(平成81.2頭)、那智勝浦町46頭(平成31.8頭)と平成並である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 出穂の早い作型で、周辺に雑草が繁茂していると被害を受けやすい。

② 雑草地のイネ科雑草が発生源となる。本田への成虫の飛来を防ぐためには、出穂10日前までにはほ場周辺を除草する。

③ 出穂後、本田内でホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、シラホシカメムシなどの飛来を認めたら、乳熟期(出穂10日後)から糊熟期(出穂20日後)にスミチオン剤、MR.ジョーカーEWなどの薬剤を散布する。カスミカメムシ類の発生が多い場合は穂ぞろい期(出穂3日後)にも薬剤散布する(「防除指針」参照)。

II. 野 菜

1. 疫病(トマト、キュウリ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 日高地域の露地栽培ミニトマト、トマトにおける発生ほ場率は7月2半旬現在、0%（過去2年間の平均0%）であった。
 - ② 日高地域の露地栽培キュウリにおける発生ほ場率は7月4半旬現在、0%（過去2年間の平均0%）であった。
 - ③ 8月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 排水を良くし、株元に滞水しないようにする。

2. モザイク病(トマト、キュウリ)

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 日高地域の露地栽培ミニトマト、トマトにおける発生ほ場率は7月2半旬現在、0%（過去2年間の平均0%）であった。
 - ② 日高地域の露地栽培キュウリにおける発生ほ場率は7月4半旬現在、0%（過去2年間の平均0%）であった。
 - ③ 8月のアブラムシ類の発生量は平年並と予想される。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① アブラムシ類の防除を徹底する。

3. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、モモアカアブラムシの発生ほ場率0%（平年3.7%）、寄生葉率0%（平年0.1%）、ワタアブラムシの発生ほ場率10%（平年3.9%）、寄生葉率0.5%（平年0.3%）と平年並であった。
 - ② 7月の黄色水盤（紀の川市）への飛来数は、4半旬現在27頭（平年38.9頭）である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 同一薬剤の連用を避ける。

4. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、ナミハダニは発生ほ場率10%（平年11%）、寄生葉率6.0%（平年0.8%）、カンザワハダニは発生ほ場率50%（平年27%）、寄生葉率20.0%（平年6.0%）と、共に平年に比べやや多かった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性が発達している事例が多い。同一薬剤の連用を避け、タイプの異なる複数の殺ダニ剤を交互散布する。

5. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、発生ほ場率30%（平年22%）、発生葉率7.0%（平年4.2%）と平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① ナスでは、選別時に被害果実を認めたら防除を始める。
 - ② 施設では、栽培終了後7～10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

6. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、発生ほ場率0%（平成12%）、発生葉率0%（平成2.7%）と平年に比べやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生が多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。

② 施設では栽培終了後7～10日間ハウスの蒸し込みを行い、その後残さを処理し、後作の発生源にならないようにする。

7. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは7月5半旬現在、発生ほ場率10%（平成2.5%）、発生葉率1.0%（平成0.1%）とやや多かった。

② フェロモントラップによる7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市23頭（平成63.0頭）、和歌山市98頭*（平成2.9頭）、御坊市124頭（平成181頭）である。

※ 和歌山市の誘殺数は7月19日まで。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 中・老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢幼虫期（網目状の被害葉がみられたとき）の防除を心がける。

② 抑制エンドウでは、ウイルス病、鳥害や防風対策を兼ねて、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される。

8. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① フェロモントラップによる7月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市10頭（平成10.7頭）、御坊市146頭（平成96.0頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ハスモンヨトウに準ずる。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除）における7月中旬の発病度は25.6（平成23.0）と平成並、防除区の発病度は0.5（平成1.1）と平年に比べ低かった。

② 7月中旬の巡回調査によると、各地域で広く発病がみられた。発病園率は55%（平成54%）、発病度は2.2（平成2.5）と、いずれも平成並であった。

③ 7月の累積降水量（7月20日まで）は202.5ミリ（平成136ミリ）と平年に比べ多く、7月中旬に雨天が数日間続いたことによる防除遅れのため、病原菌の密度が産地全域で高いと思われる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 後期感染防止のため、8月中下旬の防除を徹底する。

② 枯枝や剪定枝の除去を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）における7月中旬の発病果率は3.1%（平年9.4%）と平年に比べ低かった。
- ② 7月中旬の巡回調査によると、各地域の罹病性品種で広く発病がみられた。発病園率は25%（平年26%）、発病果率は1.5%（平年1.5%）と、いずれも平年並であった。
- ③ 8月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 罹病性品種の場合、果実への感染が可能な期間は長く、付傷すると10月下旬まで発病する。台風等で強風雨が予想される場合には、事前に銅水和剤（炭酸カルシウム剤200倍加用）を散布する。
- ② 夏秋梢の病斑は、翌春の主要な伝染源になるので剪除および薬剤防除に努める。幼木、高接樹ではミカンハモグリガの防除を徹底する。
- ③ 防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）における7月中旬の発生量は平年に比べ少なかった。
- ② 7月中旬の巡回調査における発生園率は30%（前年49%、平年39%）で平年に比べやや低かった。寄生葉率は4.8%（前年7.9%、平年14.3%）で平年に比べ低く、100葉あたり雌成虫数は11頭（前年17頭、平年76頭）と平年に比べ少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一薬剤を年間に2回以上使用しないことが重要である。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期 第2世代2令幼虫最盛期 8月4半旬（平年並）
発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）での第1世代成虫の初発時期は平年並であった。
- ② 県予察ほ場（無防除）、各地域での第1世代幼虫の発生量は平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生園では、8月中旬に散布むらのないように葉裏まで十分量散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除）における7月中旬の発生量は平年並であった。
- ② 7月中旬の巡回調査によると、発生園率は17%（前年15%、平年16%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 寄生果率が15%以上または100果あたり15頭以上に達すると防除する。
- ② 発生園およびイヌマキやサンゴジュの隣接園では防除を徹底する。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 産卵量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除）、各地域における初発の時期はやや遅く、発生量は平年並であった。また、7月の成虫の発生量は平年並であった。

② 発生源となる放任園や管理不良園が増加している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 成虫の捕殺に努め、放任園周辺など発生が多い園では株元散布を行う。

<カ キ>

1. 炭そ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 7月中旬の巡回調査では、「富有」の発病果率は0%（平年0.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 適切な肥培管理と園内の通風・日照の改善、発病枝の剪除などの耕種的防除を行う。

② 薬剤は発育枝にも十分散布する。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 7月中旬の巡回調査では、「富有」の発病葉率は12.2%（平年15.4%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらってていねいに散布する。

② 盛夏期には孢子形成を一時休止するが、8月下旬頃から秋雨前線が停滞すると感染が再開されるので、防除が必要である。

3. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 7月中旬の巡回調査では、発病葉は認められなかった。

② 前年秋期の発生から、越冬密度は角斑落葉病、円星落葉病ともに並と考えられる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹勢が低下すると発病を助長させるので、肥培管理に努める。

② 角斑落葉病は二次伝染を繰り返すので、多発園では発病後も防除を励行する。

4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 7月中旬の巡回調査では、「富有」の寄生果率は7.8%（平年8.1%）、「平核無」・「刀根早生」は1.6%（平年1.7%）と平年並であった。

(3) 防除上注意すべき諸点

① 8月上中旬が1齢幼虫の発生時期にあたり、防除適期である。

② 薬剤が十分かかるよう、茎葉の混み合いをなくす。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯における越冬成虫および新成虫の誘殺頭数は、紀南地域では5月上旬以降、紀北地域では6月上旬以降、多発した2006年や2008年に比べ多くなっている。チャバネアオカメムシやツヤアオカメムシが主体である。
- ② カキの巡回調査における被害果は、7月中旬時点では、いずれの品種においてもみられなかった。
- ③ ヒノキ花粉飛散数比（本年／前年）は0.16であり、カメムシの発生量に対して餌となる球果の量が不足気味となるため、7月下旬以降、果樹園に飛来して被害が増加すると考えられる。

(3) 防除上注意すべき諸点

- ① 今後山林隣接のカキ園を中心とした果樹園への飛来に注意し、飛来や被害のみられる場合には、速やかに薬剤散布を行う。
- ② 台風の通過後に一時的に多くなることがあるので注意する。
- ③ 平成22年度発生予察注意報第2号、第4号および県農林水産総合技術センターのホームページの果樹カメムシ情報を参照する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○ **農業環境保全室ホームページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○ **和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。